

〈学術論文〉

成立期社会科における梅根悟のコア・カリキュラム論の摂取と実践  
—「愛宕プラン」の作成に着目して—

篠崎正典 信州大学学術研究院教育学系

キーワード：成立期社会科，梅根悟，コア・カリキュラム，「愛宕プラン」

1. はじめに

1947年3月に文部省が発行した『学習指導要領一般編（試案）』（以下、『一般編』）は、「地域の特性や学校の施設の実情や、さらに児童の特性」<sup>(1)</sup>に応じた各学校による自主的な教育課程の編成を奨めた。これを受けて、全国の小・中学校では、カリキュラム研究を校内研究の中心の据え、教育課程の編成が盛んに行われる。こうした中で、新しく誕生した社会科は、多様な展開をみせることとなる。

一方で、それまで国定教科書を用いた画一的な教育を行ってきた教師たちにとって、カリキュラム研究を行いながら社会科を実施することは、極めて困難な作業であった。そこで、教師たちが行ったことが、民間教育団体であるコア・カリキュラム連盟（以下、コア連）<sup>(2)</sup>に加盟して教育学者の指導を受けることであった。コア連の中でも、学校現場の実践に影響を及ぼした教育学者として知られるのが梅根悟（1903-1980）<sup>(3)</sup>である。

梅根は、『生活学校の理論』（1948年）で、社会科の誕生に対して、「生活教育の夢が実現し、われわれの新しい児童中心主義が実現する」<sup>(4)</sup>と期待を込めて述べている。社会科成立当初、梅根は、「人生カリキュラム」論という独自のコア・カリキュラム論を構想している。「人生カリキュラム」論とは、人の人生は「遊び」「奉仕」「職業」の3領域から構成され、人は成長する中で3領域のいずれかがコアになるというものである<sup>(5)</sup>。梅根は、3領域のうち「奉仕」の役割を果たすものを社会科とし、社会科を「社会奉仕科」として捉えている。こうした考えを持つ梅根について、矢川徳光は「全日本の教育界に最も強い影響力を与えている学者」<sup>(6)</sup>と評価している。したがって、梅根の「人生カリキュラム」論が学校現場で如何にして摂取され、実践化されたのかを考察することは、多様な展開をみせた社会科の実施過程の一端を明らかにする上での必要な基礎作業であると言える<sup>(7)</sup>。

しかしながら、社会科の実施過程における梅根の「人生カリキュラム」論の摂取と実践化は十分に明らかにされていない。その理由は、梅根のコア・カリキュラム論は「短期間に大きく変化した」<sup>(8)</sup>ため、1954年頃に最終的に到達し、影響力が大きかった三層四領域論が研究対象として注目されてきたことがある<sup>(9)</sup>。同時に、梅根の指導を受けて作成されたプランとして明石プランや春日井プラン<sup>(10)</sup>等が分析されてきたが、それらは1949年前後に梅根が提唱した日常生活单元論の影響を受けたもの、あるいは、複数の研究者の一人として梅根が指導に関わったものであるため、「人生カリキュラム」論の影響は見られなか

った。ゆえに、「人生カリキュラム」論については、紹介の域を出ていないのである<sup>(11)</sup>。

そこで本稿で着目するのが、茨城県師範附属女子部附属小・中学校（以下、茨城女子附小中）による『九ヶ年のカリキュラム＝水戸・愛宕プラン＝』（以下、「愛宕プラン」）の作成である。茨城女子附小・中では、1947（昭和 22）年度に開始した社会科研究を 1948（昭和 23）年度から梅根の指導下でカリキュラム研究へと発展させ、1949（昭和 24）年 9 月に「愛宕プラン」を完成させている。その際、茨城女子附小中が参考にしたのが、梅根の「人生カリキュラム」論である。そのため、「愛宕プラン」は、小学校と中学校の 9 年間における児童生徒の学習を「児童生徒の現実的生活意欲を社会人の生活主体である職業的生活に素直にマッチさせて行」<sup>(12)</sup>なうことを目指した「社会的職業的生活経験」をコアとする 9 カ年一貫のカリキュラムであった。こうした特徴を持つ「愛宕プラン」のコアについて、梅根は、「社会科であるとともに、職業科（一般職業科）であり、職業のトライ・アウト・コースの役割も十分に果たしている」とし、「職業教育を非か忌避する傾向の強い」中都市の附属学校でこのようなカリキュラムが作成されたことを高く評価している<sup>(13)</sup>。

「愛宕プラン」に触れた先行研究では、戦後初期の茨城県下で展開された社会科実践における「愛宕プラン」の存在<sup>(14)</sup>、「愛宕プラン」で行われた美術教育の実態<sup>(15)</sup>、および社会科と職業科をコアとするコア・カリキュラムの中で国語教育が行われたこと<sup>(16)</sup>への指摘がされているのみである。よって、「愛宕プラン」が、上記のようなカリキュラム構造を有するプランとして作られた背景は明らかになっておらず、改めて、梅根の「人生カリキュラム」論との関わりから作成過程を検討する必要がある。

以上を踏まえ、本稿では、成立期社会科実践における梅根悟の「人生カリキュラム」論の摂取と実践化について、茨城女子附小中による「愛宕プラン」の作成過程とカリキュラム構造の分析を通して明らかにすることを目的とする。そこで、次の手続きを取る。まず、「愛宕プラン」の作成過程における梅根の関わりを明らかにする。次に、「愛宕プラン」の理論的背景となった梅根の「人生カリキュラム」論について、社会科との関わりに着目して明らかにする。その上で、「愛宕プラン」のカリキュラム構造と梅根の「人生カリキュラム」論との関わりを考察することで、上記の目的を達成したい。

## 2. 茨城女子附小中による「愛宕プラン」の作成と梅根悟

### （1）社会科の実施と生活教育への着目

第二次世界大戦後の茨城女子附属小中における教育研究は、附属中学校が新設される前の 1946 年 2 月に水戸市立渡里小学校との共催で行った再建教育協議会に始まる<sup>(17)</sup>。それは、1945（昭和 20）年 8 月 2 日に水戸市を襲った焼夷弾爆撃により、校舎が焼け、授業ができない状況にあったからである。その後、茨城女子附小中は、戦災を免れた渡里小学校を利用して毎年 1 回の研究会を続けることとなる<sup>(18)</sup>。茨城女子附小中は、この時期について、「新しい社会観のもとに、生活教育の道の実践探究に出発」<sup>(19)</sup>した時期としている。

1947（昭和 22）年になり、文部省による『一般編』の発行、4 月 1 日からの六三制の実

施による附属中学校併設を受け、「真剣に民主化の教育目標を求め地域化された教育の在り方」<sup>(20)</sup>を模索し始める。また、5月に文部省から『学習指導要領社会科編Ⅰ（試案）』（以下、『要領Ⅰ』）が発行されると、9月からの全国の小学校での社会科の授業開始に合わせて社会科の実践研究に着手することとなる。

茨城女子附小中の社会科の実践研究の中心となったのが寺門光輝である。寺門は、1942（昭和17）年4月から1957（昭和32）年4月までの間、茨城女子附小中の社会科研究を牽引した教師である<sup>(21)</sup>。寺門により、茨城女子附小中の社会科研究の方針が公にされたのが、1947年12月11～13日に広島高等師範学校附属小学校で開催された社会科教育協議会<sup>(22)</sup>である。この会で、寺門は「社会科実施上の基本問題」という題で報告している。この報告によれば、茨城女子附小中は、社会科を「民主的生活をさせることにより、その生活を一步一步向上させ、民主的公民をつくることをめざすもの」<sup>(23)</sup>と捉えている。具体的には、『如何に見、如何に考え、如何に行動するか』即ち『如何に生くべきか』の解決を促す<sup>(24)</sup>のが社会科であり、生活科と同義であるという。そのため、教師には、「子供と共に、『民主的生活とは』『社会の真実とは何か』と考えて止まない熱意と、学習指導に即してその真実を見せていく指導」が求められるとする。さらに、社会科の精神を生かすためには、学習指導要領に基準を置きつつ、「ある生活題目の下に、社会科家庭科その他算数国語図画工作等の一部を融合して中核教科をつくり、融合に無理なものは分離教科としておく、之に自由研究科及体育衛生を加えて四本だけとする」<sup>(25)</sup>ことの必要性を述べている。このように、茨城女子附小中は、全国で社会科が実施されて間もない時期に、社会科を生活科と捉え、中核教科の中で行うことで、その精神を具体化できると考えていたのである。

## （２）「愛宕プラン」の作成過程

以上のような、社会科のあり方を究明するために、茨城女子附小中は、1948年度から本格的にカリキュラム研究に着手する。寺門は、茨城師範学校教育研究所において、「昭和二十三年度教官研究題目」を「小学校社会科を中心とする教科課程の研究」<sup>(26)</sup>にしている。その際に手がかりにしたのが、梅根悟のコア・カリキュラム論である。茨城女子附属小中が着目した梅根の論とは、山崎喜与作が編集した『コア・カリキュラムの研究』（1948）に掲載された梅根の論考「コア・カリキュラムについて」で示されたものである。この論考が、「幼稚園から大学までをつらぬくコアの内容は職業的生活経験の系列であるべきである」<sup>(27)</sup>というコア・カリキュラム論、すなわち「人生カリキュラム」論である。

そこで茨城女子附属小中は、梅根を指導者に招いて研究に着手する<sup>(28)</sup>。茨城女子附属小中が梅根を指導者とした背景には次の2つの理由があったと考えられる。1つ目は、梅根のコア・カリキュラム論の妥当性である。寺門によれば、当時の教育学者たちが言及したコア・カリキュラム論の中で、茨城女子附小中が目指す社会科を具体化のために「ぴったり」<sup>(29)</sup>だったのが梅根の論であったという。2つ目は、茨城女子附属小中と梅根との戦前からの関わりである。戦前期に梅根は、茨城師範附属小主事として新教育を推進<sup>(30)</sup>している。この時期に、梅根と関わった教師が当校の研究の中心となっている教師たちである<sup>(31)</sup>。

梅根の指導下で、茨城女子附属小中が取り組んだのが、小・中学校の9年間を貫くコア・カリキュラムのコアになる「社会的職業的生活経験系統表」の作成である。そこで教師達は、父兄の協力を受けて「水戸市における地域社会の生活課題調査」を実施する<sup>(32)</sup>。この成果を踏まえ、茨城女子附属小中は、1949（昭和24）年の1月中旬に「社会的職業的生活経験系統表」を完成させ、2月11、12日の研究会「カリキュラムと学習活動」で「社会的職業的生活経験」をコアとする教育計画の試案として『カリキュラム研究 プラン＝第三次試案』（以下、第三次案）を発表したのである。同時に、『基礎的な学習も疎かにしないために『学習活動の要素表（一年－九年）』（以下、「要素表」）を発行し、周辺教科の学習で押さえるべき内容と育成すべき力を示している<sup>(33)</sup>。

しかしながら、第三次案の作成過程で行った「水戸市における地域社会の生活課題調査」は、「学習指導に直接役立つ」<sup>(34)</sup>ものとして納得いくものではなかった。そこで、その在り方を反省し、「調査した内容を活用すること」と「社会的職業的生活経験の原則をコアとするカリキュラム」に対応することの2点に重点に置いた社会調査を実施することとなる。前者については、「カリキュラムの構成」「学習指導の内容の決定」「指導上利用し、活用すべき材料調査」「郷土社会の改善に努力したり、手伝ったり、奉仕したりする現場をよく理解してそれらを実行する」という4点、後者については、「職業を中心として実施」するということであった。特に、「子供の生活世界と大人の生活世界とのギャップをとりのぞく」ために、子供に大人の世界を「よく見させ、まねさせ、手伝いをさせる」ことが必要であると、後者を重視する。そのため、「職業別人口及び戸数」「職業別施設」「郷土社会の課題発見」「職業生活」の4つの調査を「1 職業人を訪問する」「2 実際に職場を見学する」「3 各代表者の会合をもつ」「4 専門の学者、教育家の意見をきく」「5 職員の協議会を開いて話合う」という5つの方法を用いて地域社会の職業を明らかにしたのである。この成果を踏まえて茨城女子附小中が7月31日までにまとめ、9月10日に発行したのが「愛宕プラン」である。「愛宕プラン」は、9月30日から10月1日にかけて開催された研究会「カリキュラム経営の反省と前進」において公開され、茨城県下で注目されることとなる<sup>(35)</sup>。

以上のように、茨城女子附小中の「愛宕プラン」の作成に梅根が与えた影響が大きなものであったことは確かである。では、寺門を中心とする茨城女子附小中の教師たちが、「愛宕プラン」を作成する際に参考にした梅根の「人生カリキュラム」論とはいかなるものであったか。次に、茨城女子附小中の教師たちが参考にした前述の梅根の論考「コア・カリキュラムについて」から「人生カリキュラム」の構造を捉える。その上で、「人生カリキュラム」における社会科の位置について、同時期に梅根が発表した論考を用いて考察したい。

## 2. 梅根悟のコア・カリキュラム論と社会科

### （1）「人生カリキュラム」の構造

梅根は、アメリカと日本におけるコア・カリキュラムの使用を検討している。それによれば、アメリカでは「中心統合法の意味での中心課程」と「共通必修課程或は基本課程」

の 2 つの意味で使用されているという。前者は、「小学校でも中学校、或いはそれ以上の学校でも一様に使われる概念」であり、後者は、「中等学校以上、特に中等学校で使われる概念」<sup>(36)</sup>とする。対して、日本では、「中心になる課程」と「コア（或は、コア・カリキュラム）を持っており、それを統一の核として統一的に構成されている全教育計画」<sup>(37)</sup>と呼ばれているとする。しかし、梅根はヴァージニア・プランを検討し、「コア即ち中心で、中核で、コア・カリキュラムは全計画の中核となる特定の教材領域或は活動系列を意味するものと解するのが至当」<sup>(38)</sup>とする。その上で、コア・カリキュラムの範囲を「中等以上の学校だけの問題だけの問題でなく、むしろ小学校から大学まで一貫した問題」<sup>(39)</sup>とする。

続いて、梅根は、コアについて、アメリカと日本の動向を検討して次のように述べる<sup>(40)</sup>。

「私はヘルバルト派のように伝統的な教科の中のどれか一つをコアにすることはもちろん反対であるし、合科教授式にすべて教科の内容を一つの皿に盛り合せたような総合ユニットによるコアにも賛成しかねるし、更に社会科的な総合ユニットでいこうという考えには同じ難い」。

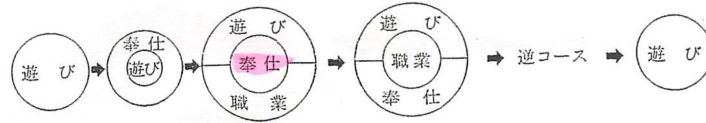
これは現状に対する梅根の批判とも言うべき文だが、ここには「教科主義」を脱脚していない「学習学校的カリキュラム」ではなく、本当の意味での「生活学校カリキュラム」を構想しようとする思いが背景にあった。すなわち、それは「学校教育を卒えた時には青少年たちはどんな風に教育されていることが望ましいか、ということが先決問題で、先ずそれがきまっていなければ中間の段階も初歩の段階もどうしたらいいか分からない」<sup>(41)</sup>とし、幼稚園から大学までの一貫性を重視することの主張でもあった。

そこで梅根は、幼稚園から大学に至る学校教育のあるべき姿の明確化を主張する。そこでは、「今日及び明日の社会を支えて行くのになくってはならない重要な職業活動の体験の系列」<sup>(42)</sup>をコアとすべきとし、カリキュラム系列の決定方法を次のように述べる<sup>(43)</sup>。

「自己の個性に適した職業を発見するためにも、また広く他人の職業に理解をもち、それに正しく協力し得るためにも、中等教育のコアは広くあらゆる社会的に重要な職業活動を体験し、それについて考え、理解を深め、且つその現状を批判することではなければならない。そして、その下の段階即ち初等教育の段階に於いては未だ子どもたちは実際の職業活動を体験し得る年齢に達していないから、そこでのコアは職業活動を見物したり、模倣して遊んだりすることが主となるだろう。幼稚園のコアもまた同様である。」

以上より、梅根のコア・カリキュラム論におけるコアの内容と組織の仕方は次のようにまとめることができる。幼稚園から大学まで続く職業活動の体験の系列をとること、初等教育では、大人のする職業活動を見物したり、模倣して遊び、中等教育においては、社会的に重要な職業活動を体験したり、考えたり、理解を深めながら職業活動の現状を批判するという学習を行う。こうした梅根の考えを具体化したコア・カリキュラム論が、【図 1】に示す、人の人生を「遊び」「奉仕」「職業」の 3 領域に区分した「人生カリキュラム」(Curriculum Vitae) 論なのである<sup>(44)</sup>。

【図1 「人生カリキュラム」論の構造】



(梅根悟「生活学校とコア・カリキュラム」(『カリキュラム』創刊号, 1949) 8頁より転載)

## (2) 「社会奉仕科」としての社会科

では、梅根は、「人生カリキュラム」の中に社会科をどのように位置付けているか。梅根は、社会科を三つの領域のうちの一つであり、「生活教育のコア」と位置付ける<sup>(45)</sup>。その上で、「奉仕」、すなわち「社会奉仕」を担当する「社会奉仕科」と定義している。

梅根は、「社会奉仕科」としての社会科の目的について、次のように述べる<sup>(46)</sup>。

「社会科はかかる実践の見習いの生活を中心とし、それを裏づける働きとしてかかる実践のための理解、認識、態度、技術を養わなければならない。社会科は社会奉仕による、社会奉仕のための実践的叡知、叡智的实践の教育をめざすものでなければならぬ。それは正しい選挙をし、正しい労働活動に挺身し、正しい治安協力となり、正しい交通道德の実行者となること等々、すべて正しい社会奉仕者となることを目的とするものである。」

さらに、梅根は、「社会科はある特定の教育時期、一般的に言って、中間的時期のコアにすぎない」<sup>(47)</sup>とする。その理由について、小学校時代は「子ども」であり、大人であるかのように取り扱って奉仕や労役をさせることは、彼等の現在や将来を不幸にするという。そのため、学校教育における中間的時期である中等教育に当る時期を、社会科がコアとなる時期とする。同時に、その前後の時期の社会科は、「遊び及び職業見学生活の周辺にあってその第一衛星的地位に立つべき」<sup>(48)</sup>としている。

以上から、梅根の「人生カリキュラム」論における社会科の特徴は次のようにまとめることができる。「社会奉仕科」と定義され、「人生カリキュラム」の中で「奉仕」と位置づけられる部分を指す。初等教育段階では、「遊び」の周辺に位置し、中等教育段階においてコアとなるもの。子供が大人になった時に、進んで社会にかかわることができるための基礎的な識見と能力を「手伝い」や「協力」による学習を通して培うもの。

次に、茨城女子附小中が、こうした梅根の「人生カリキュラム」論をどのように摂取して実践化したのかについて、「愛宕プラン」のカリキュラム構造を社会科の位置に着目して分析することで明らかにする。

## 3. 「愛宕プラン」における社会科実践の展開

### (1) コアとしての「社会的職業的生活経験」

茨城女子附小中では、「愛宕プラン」を通して、「実践的生活者」を育てることを目指している。ここでいう「実践的生活者」とは、次のような性格を持つ人間である<sup>(49)</sup>。

「自己の職業選択の能力をもち、かつ職域にあつては、心をこめて仕事にあたりうる人間であり、昨日よりは今日、今日よりは明日と、絶えず生活を切り開いてゆくところの真実な生活者でなければならない。それは、いいかえれば、たえず民主的社会の一員たる自覚に立って、自己の職業上の中心課題を、総合的により調和的に向上改善して行くところの底の人間でありうる。」

すなわち、「実践的生活者」とは、民主的社会の一員として自分の生活を切り開いて行けるような人間である。

こうした児童生徒の育成を目指して作成されたのが、【表 1】に示す「愛宕プラン」のコアとしての「社会的職業的生活経験」である。この「社会的職業的生活経験」が、「動的に発展成長するところの近代学校における生活教育」<sup>(50)</sup>である梅根の「人生カリキュラム」論を理論的基盤として作成されたものである。茨城女子附小中では、「社会的職業的生活経験」を作成するために、梅根の「人生カリキュラム」論を次のように摂取している<sup>(51)</sup>。

「近代的な遊びから出発し、奉仕の段階へ、そして最後に職業を中核とする段階へと、進展して行く生活ユニットの系列を縦軸とし、社会的職業的生活経験の範囲を、職業の分類に求めてこれを横軸とし、こゝから出発して長期間にわたって、たえず構成的に営為されつゝ発展して行くところの生活上有意義な、しかも中心となる学習活動群（仕事）を設定し、これによって子供に統一と連続のある真実な生活をさせることにしたのである。」

すなわち、コアが「遊び」「奉仕」「職業」へと移行する中で、社会的職業的生活経験の範囲を職業の分類とし、仕事を中心とする学習活動を行うものとして理解したのである。

この考えは、【表 1】のスコープ（scope）とシークエンス（sequence）に次のように反映されている。スコープは、農業、林業、水産業、鉱業、土木・建築業、製造・工業、ガス業・電気業及び水道業、商業、金融、運輸・通信業、対人サービス業、自由業、公務団体、自由業、その他の 15 の職業から構成されている。これは、「水戸市における地域社会の生活課題調査」<sup>(52)</sup>で得た情報を「労働者職業安定局産業分類表（昭和 23 年 8 月）」に基づいて分類したものである<sup>(53)</sup>。シークエンスは、小学校低学年、小学校中学年、小学校高学年、そして中学校ごとに次のような特徴がある。まず、小学校低学年（1 年）では、「お店ごっこ」や「のりものごっこ」という、「ごっこ遊び」が位置付く。それが、小学校中学年（3 年）になると、「市内商店の調査」「理想的な偕楽園のもけいをつくる」などの社会調査を踏まえて自分たちの考えをまとめ、模型などにより表現する活動が見られるようになる。さらに、小学校高学年（5・6 年）になると、「農業見学と手伝い実習」、銀行に訪問して「経済上の社会問題について関心をもち解決に協力する」という、今日のインターンのような学習が目立つ。中学校段階では、「農業の手伝い」「植林及木炭の問題について研究協力」「社会事業、司法保護事業について研究と協力」等のように、大人達と職場で一緒に仕事をしたり、社会問題を調査し、その解決を模索する学習が組織されている。

このようなカリキュラムの構造について、寺門光輝は、「近代的な遊び（職業生活の模擬）

## 篠崎

【表 1 「社会的職業的生活經驗系統表」】

[illegible]

(茨城大学茨城師範学校附属愛宕小・中学校「社会的職業的生活経験をコアとするカリキュラムの運営」『カリキュラム』4, 1949, 23-25 頁より作成)



から、積極的・消極的両面の奉仕生活へ、更に職業生活の手習い、実習へと発達する生活経験<sup>(54)</sup>として構成したと述べている。すなわち、社会を職業に基づく学習内容について、子供の成長段階に応じて、「遊び」を中心とする学習から、次第に社会への「奉仕」という経験を経て社会を理解し、社会に関わっていくという段階が組み立てられていることが分かる。

以上から、「愛宕プラン」におけるコアは、職業分類に基づくスコープ、「遊び」（小学校低・中学年）、「奉仕」（小学校高学年）、「職業」（中学校）という段階を辿るシーケンスにより構成されているとまとめることができる。そのため、社会科にあたる「奉仕」は、特に小学校高学年の段階において重視されると解釈できるのである。

## （２）「愛宕プラン」における社会科の展開

では、「奉仕」はどのような内容で構成されているのだろうか。【表２】が「社会的職業的生活経験」（【表１】）に基づいて作成された「愛宕プラン」の単元一覧である。

【表２ 「愛宕プラン」の単元一覧】

		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3			
一	家から学校まで	1 たのしい学校 (60)		2 遠足(50)		3 小川 (450)	4 近所の人々 (60)		5 おみせごっこ(60)		6 のりものごっこ (60)		7 たのしいうち(60)		8 たんじょう日 (60)	
二		9 町のもけい (60)		10 ゆうびんごっこ(50)		11 おみせごっこ(50)		12 のりものごっこ(70)		13 おひやくしょうさん (60)		14 消防署 (50)		15 おいしゃさん(60)		16 おまわりさん (50)
三	水戸の町	1市内の道路 (75)		2 水ひん電車 (75)				3 住みよい家(170)					4 偕楽園(100)			
四		5 農家の生活(150)					6 配給所(170)					7 上水戸駅(100)				
五	復興	1 水戸市の復興(140)					2 保健所と病院(90)		3 郵便局と銀行(90)		4 茨城県庁(100)					
六		5 私たちの学校 (50)		6 工場(100)			7 新聞とラジオ(170)					8 復興に関係深い国々 (100)				
七	職業生活	1 中学生活の設計(40)		2 農林業生産と生活(120)					3 地下資源と生活(90)			4 水産資源と生活(80)				
八		5 工業生産と生活(120)					6 商業金融と生活(130)					7 土木建築事業と生活 (80)				
九		8 交通通信と生活(120)					9 文化と生活(130)					10 政治と生活(80)				

※ ( ) 内の数字は単元の配当時間を示す。

(茨城大学茨城師範学校附属愛宕小・中学校『九ヶ年のカリキュラム＝水戸・愛宕プラン＝』(1949) 18, 19 頁より筆者作成)

単元は、4つの主題、すなわち、「家から学校まで」(第1・2学年)、「水戸の町」(第3・4学年)、「復興」(第5・6学年)、「職業生活」(第7～9学年)に基づく計41個の単元からなる。この中で、「社会奉仕科」としての社会科が機能しているのが、「復興」の主題のもと構成された第5・6学年の単元である。具体的には、第5学年は、「1.水戸市の復興」「2.保健所と病院」「3.郵便局と銀行」「4.茨城県庁」の4つ、第6学年は「5.私たちの学校」「6.工場」「7.新聞とラジオ」「8.復興に関係の深い国々」の4つの計8つの単元からなる。以下では、8つの単元の中から、「1.水戸市の復興」を取りあげて検討する。

「1.水戸市の復興」は小学校第5学年の最初の単元である。第5,6学年では、「3,4年生よりは、いつそう社会に対しての手伝い、奉仕をする機会をできるだけ多くとりいれ、社会の改善に奉仕する習慣を養いたい」<sup>(55)</sup>という意図のもとで単元が構成されている。そのため、次の「民主的な態度」「生活能力」「基礎的技術」を身につけることをねらいとしている。「民主的な態度」とは、「1 常に明るく友達と親しみ、尊敬し合って協力していく」「2 何事にも熱心に工夫し、最後まで努力をつづける」「3 正義感があり、礼儀正しく且、健康である」「4 寛容、自制、責任等を重んずる」「5 前述の『奉仕』をする習慣」「6 物事を歴史的に、地理的に、又科学的に道徳的に見たり考えたりする」である。「生活能力」とは、「1 疑問をもち、その解決に積極的に努力する」「2 科学的合理的な計画を立てる」「3 各方面からたくさんの種類の資料を集める」「4 資料から正しく判断する、帰納する、概括する」「5 正しく、美しく、能率的に表現する」「6 奉仕の能力、その他見学・調査・研究・まとめの能力」である。「基礎的技術」とは、「1 よむ、書く、話す、きく、作る、計算する、測る、えがく、つくる、うたう、おどる等」「2 より正しく、美しく、速く、能率的に、経済的に」である。これらは、前掲の周辺教科の「要素表」から取りあげられている。

「1.水戸市の復興」の具体的な展開を示したのが【表3】である。「1. 水戸市の復興」は、「設定の理由」「価値」「導入」「展開」「評価」「参考事項」から構成される。「社会奉仕」としての特質は、「設定の理由」に表われている。それは、「水戸市の復興は日本の復興」と捉え、「復興の動きと将来について理解させ協力させ生活の成長と新日本建設者としての自覚を養いたい」ということである。そのため、「価値」の「態度」において、「2.今後の日本の生活を考えていくようになる」「3.復興問題の解決に協力する」ということを単元における目標としている。その目標に基づいて構成された「展開」は、「一、地図を見よう」「二、はっきりと調べてみよう」「三、鳥瞰図をかこう」「四、復興状況を話し合おう」「五、水戸市の沿革をしらべよう」「六、住みよい水戸市の模型を作ろう」「七、復興に協力出来る面を考えて実行しよう」「八、発表会を開こう」からなる。「一」「二」「三」において、水戸市の状況を掴み、その中から「四」にある復興の問題を抽出する。「四」を考えるために、「五」により水戸市の今昔を調べ、今後の水戸市のあり方を「六」により構成する。その上で、水戸市の復興のために、自分たちに出来ることを考え（「七」）、行動する（「八」）という構成となっている。このことは、「評価」において、「復興状況をどれだけ理解したか」「道路清掃、緑化運動その他協力に対する積極的な奉仕状況」という点で評価される。

成立期社会科における梅根悟のコア・カリキュラム論の摂取と実践

【表3 単元「水戸市の復興」(第5学年)の展開】

単元1	水戸市の復興		4月下旬～7月下旬 凡そ140時間(小学5年)	
設定の理由	○水戸市の復興は日本の復興である。復興の動きと将来について理解させ協力させ生活の成長と新日本建設者としての自覚を養いたい。			
	○子供達は前単元上水戸駅について調べ水戸市の一部分を知ったが全体の水戸市を知り水戸市の位置、公共の建物、町の様子について詳しく見、復興しつつある現状を再認識させる必要がある。			
	○子供達はこの単元を学習するに足る十分な能力を有するものと信ずる。			
	○父兄及び各機関の人々の協力を得て、この単元がスムーズに進められる事を確信する。			
価値	理解	1. 関東地方の位置、各県について知る。 2. 水戸市の位置を図面上で知る。 3. 鳥瞰図の書き方を知る。 4. 水戸市の沿革について時代的に知る。 5. 公共の建物、施設、住宅、商店街、交通機関、保健施設について明るくなる。 6. 復興に関係ある職業生活や仕事を理解する。 7. 復興資料及びその入ってくる所を知り地理的に明るくなる。 8. 水戸市、都市計画の内容を知る。		
	態度	1. 頭で考えている事を行動を通じて表現するようになる。 2. 今後の日本の生活を考えていくようになる。 3. 復興問題の解決に協力する。 4. 他人の道具や準備されたものに対して互いにゆづり合うようになる。 5. 他人の意見を尊重し自分のものに取り入れていくようになる。 6. 種々の作業を通じ行動が活発機敏になり根気よく仕事を継続して行くようになる。 7. 計画と実践が身につく。		
	技能	1. 図表模型等に表現する技能が上達する。 2. 地図を読んだり、書いたりする技能が上達する。 3. 数理的な計算法が上達する。 4. 計画・訪問・見学・発表等ではなし方が伸びる。		
導入	○前単元「上水戸駅」を調べた子供達は、更に水戸市全体を知りたいという欲求に燃えて居る。水戸市全体がはられ、水戸市に関する書物、絵はがきが飾られると「上水戸」はどの辺だろうか、本校は県庁はと、地図上に示された位置を興味深い眼でながめるであろう。今学期の構想を簡単にのべると子供達は今後の学習の計画を話し合い希望と喜びにみちた新学期、胸を躍らせながら次の様な学習活動に知らずに入っていくであろう。			
展開	月	学習活動	留意すべき学習活動	その他の学習
	4	一、地図を見よう ○水戸市全国図をはり、話し合う	○話し合い ○水戸市全国図の理解 ○地図をよむ	生活 国語
		5	二、はっきりと調べてみよう ○どこをしらべるか相談する ○調べるもの(知りたいもの)を夫々紙に書いて提出する ○まとめる方法を話し合う ○各班毎に計画表をかく(集って相談してきめる) ○調べにくい ○帰校報告(班毎) 質疑応答	○計画性 ○質問事項のまとめ方 ○出来得る限り見学する ○協力して考える ○話し合い ○話し合い ○略図の書き方 ・縮尺割合 ○報告文、感想文のかき方 ○計画性の涵養 ○調査態度 ○準備 ・巻尺 ・画用紙 ・地図 ・筆記用具 ・えのぐ
	6	三、鳥瞰図をかこう ○鳥瞰図のかき方を考える ○班毎に調べたものを描く	○意見の発表 ○協力する態度 ○確実に ○他班との協調連絡 ○構図・彩色	理科
		四、復興状況を話し合おう ○地図(鳥瞰図)を前に話し合う	○話しあふ態度内容 ・要点 ・明瞭	音楽
		五、水戸市の沿革をしらべよう ○水戸市の昔のことを調べる ○水戸の今昔を紙芝居にする ○低学年にやつてみせる	○水戸市の今昔史 ○資料集の利用の仕方 ○シナリオの作り方 ○班毎に協調 ○他学級との連絡 協和する心 ○他学級との連絡 協力する心	図工
		六、住みよい水戸市の模型を作ろう ○住みよい水戸市を考える ○模型をつくる ○復興資源がどこからくるか調べる	○訪問の態度 ○まとめる力 ○設計図の書き方 ○計画態度 ○作り方 ・縮尺 ○電池の理解	家庭 保健体育
		七、復興に協力出来る面を考えて実行しよう ○協力できる面をあげる	○相談(討議)の仕方 ○ポスターの描き方	
		八、発表会を開こう ○反省・発表会の相談 ○発表会を開く	○自主的な企画と実行 ○感謝の気持 ○発表態度	
		評価	○復興状況をどれだけ理解したか ○市役所見学の態度及び研究調査の態度 ○模型製作、製作品、態度の観察、発表の態度、計画性 ○水戸市の沿革の理解度 ○復興に対する正しい理解 ○道路清掃、緑化運動その他協力に対する積極的な奉仕状況 ○協力して計画を立て実行する態度は伸びたか ○創意工夫にどの位努力するかー模型作りその他 ○寛容の態度、責任感はどうか ○他に依頼せず、独立の心を持って生活するか ○参考書から知識を得る能力はのびたか ○新しい言葉を覚えたか ○必要な計算能力、話し合ってまとめる能力は伸びたか	
参考事項	○見学の場所(市役所、県庁、水戸駅等水戸市内、公共建物) ○参考書(卒業生の研究物、中学1年生の研究物(都市計画)、地図、絵はがき、写真、その他進行するにつれて資料を集める) ○其の他(父兄をはじめ社会一般人の十分な協力を得て実施する)			

(茨城大学茨城師範学校附属愛宕小・中学校『九ヶ年のカリキュラム＝水戸・愛宕プラン＝』(1949)

137-143 頁より筆者作成。下線は筆者。)

以上から、「社会奉仕」としての社会科は、「復興」の主題のもと構成された第 5, 6 年の単元において重視されており、その内容は、水戸市の現状を踏まえ、今後の水戸市のあり方について模索し、そのために自分たちでできることを考え、実行するというものであったのである。

## 5. 結語

これまでの考察を通して、茨城女子附小中における梅根悟の「人生カリキュラム」論の摂取とその実践化について、次の 3 点が明らかになった。

第一に、茨城女子附小中が「愛宕プラン」を作成する上で、梅根の「人生カリキュラム」論に依拠した背景には、当校の教育理念との整合性からである。茨城女子附小中は、1948 年度から着手した社会科を膨らませた中核教科をコアとするコア・カリキュラムの研究は、『如何に見、如何に考え、如何に行動するか』即ち『如何に生きべきか』の解決を促した生活科としての社会科の実現を目指して行われた。その目的の達成のための理論として教師たちが注目したのが、社会的職業的生活経験の系列からなる幼稚園から大学までをつらぬくコアを有する梅根の「人生カリキュラム」論であった。同時に、梅根が戦前期に茨城附小の主事であった時から続く教師たちとのつながりが、茨城女子附小中の指導者として梅根を招くことへと繋がっていた。

第二に、梅根の「人生カリキュラム」論において、社会科は「社会奉仕科」として位置付いていたことである。「人生カリキュラム」論は、幼稚園から大学まで続く職業活動の体験の系列をとり、初等教育においては、大人の職業活動の見物や模倣した遊び、中等教育においては、社会的に重要な職業活動を体験したり、考えたり、理解を深めながら職業活動の現状を批判するという学習を行うものであった。また、人の人生を「遊び」「奉仕」「職業」の 3 領域に区分した構造を有し、この 3 領域の中で「社会奉仕」を中心とする「奉仕」を担うものが社会科とされた。さらに、「社会奉仕科」としての社会科がコアとしての役割を果たす時期は、子どもの発達を踏まえると中等教育段階の時期であるとしている。

第三に、「愛宕プラン」は、梅根の「人生カリキュラム」論に基づいて、「社会的職業的生活経験」をコアする 9 年一貫のコア・カリキュラムとして実践されたことである。9 年間の学習は、「遊び」による学習（小学校低・中学年）、「社会奉仕」による学習（高学年）、「職業活動」による学習（中学校）という流れで組織され、社会科は、この中で、「社会奉仕」による学習を行う小学校高学年で重点的に扱われた。その内容は、単元「水戸市の復興」（第 5 学年）に見られるような、水戸市の現状を踏まえ、今後の水戸市のあり方について模索し、そのために自分たちでできることを考えて実行する学習であった。一方で、社会科を中等教育段階のコアに位置づける梅根の考え方との間には少しのズレがあった。これは、梅根が幼稚園から大学までの時期を見通してカリキュラムを構想していたところを、茨城女子附小中は 9 年間の中で具体化したことが関係していると考えられる。

これまでも成立期社会科の実施過程における梅根の影響力の大きさは指摘されてきたが、

梅根の考えが学校現場で実践化された実態は不明であった。こうした中で、「社会科」がコアとして機能する時期の若干のズレはあるが、梅根の指導を受けながら、「人生カリキュラム」論に依拠して社会科を実施した「愛宕プラン」の取り組みは、上記のような研究史の穴を埋める貴重な事例であると言える。同時に、「愛宕プラン」に見られる「社会奉仕科」としての社会科実践の取り組みは、当時、多様な展開をみせた成立期社会科実践における一つの形として社会科教育史上に加えることも必要であろう。

今後は、同時期の茨城師範学校の男子部附属小中学校によるコア・カリキュラム<sup>(56)</sup>との比較、当時の教師や児童生徒の声を踏まえた上でのより詳細な「愛宕プラン」の実態解明に努め、「愛宕プラン」の独自性、及び実践を行う中で抱えた課題<sup>(57)</sup>等を明確にしたい。

## 付 記

本研究は、中等社会科教育学会第26回研究大会（於筑波大学，2007）での発表内容に修正を加えたものである。史料収集に際しては、寺門光輝先生（茨城キリスト教大学名誉教授）と木村勝彦先生（茨城大学教授）に多大なる御配慮を賜った。この場を借りて厚く御礼申し上げる。なお、本研究の一部は、JSPS 科研費（若手研究（B），16K1743900）（基盤研究（C），17K04763）によった。

- (1) 文部省『学習指導要領一般編（試案）』（1947）1 頁。
- (2) 1948（昭和 23）年 10 月 30 日に、東京高等師範学校附属小学校（現筑波大学附属小学校）の講堂で結成された民間教育団体である。コア連は、東京文理科大学の石山脩平や梅根悟らを中心とする教育学者と各地の推進校が共同で研究を進めることを目的に設立された。そのため、当時、「民間文部省」と言われるほど、学校現場の教育実践に影響を与えた団体であった。コア連盟は、研究や実践を深化・発展させる中で、1953（昭和 23）年に日本生活教育連盟へと名称を変更し、今日に至る。コア連の設立については、春田正治『日生連物語—戦後生活教育運動のうねり』（民衆社，1988）が詳しい。
- (3) 梅根の略歴は次の通りである。1903 年福岡県嘉穂郡宮野村（現嘉麻市）生まれ。1923 年小倉師範学校を卒業し、東京高等師範学校に進学。1927 年東京高等師範学校を卒業し、岡山師範学校教諭になる。1930 年東京文理科大学教育学科に入学し、1933 年に卒業する。卒業論文は「近世教育思想史における自然概念及び合自然原理の発展」。卒業後、1933 年 5 月から茨城師範学校附属小学校の主事となり、『労作教育新論』を出版する。1936 年 10 月から埼玉師範学校附属小学校主事、埼玉県立本庄中学校長、埼玉県川口中学校長、川口市助役を経て、1948 年 2 月東京文理科大学助教授となる。1949 年 8 月から東京教育大学教授、東京文理科大学教授を兼任する。その間、コア・カリキュラム連盟の副委員長、日本生活教育連盟の委員長となり、生活教育の普及にあたる。1954 年 4 月、「中世ドイツ都市における公教育制度の成立過程」で東京文理科大学より文学博士の学位を受ける。その後、東京教育大学教育学部長、和光大学初代学長等を歴任する。1980 年 3 月没。（梅根先生の退官を記念し新出書を祝う会編『ある教育者の遍歴』（誠文堂新光社，1966）、梅根悟編『教育研究五十年の歩み』（講談社，1971））
- (4) 梅根悟『生活学校の理論』（1948）170 頁。
- (5) 梅根悟「生活学校とコア・カリキュラム」（『カリキュラム』2，1949）6 頁。
- (6) 矢川徳光『新教育への批判』（誠文堂新光社，1950）144，145 頁。
- (7) 成立期社会科への梅根の影響については、谷川が著書『社会科理論の批判と創造』（明治図書，1979）21 頁でも触れている。
- (8) 中西修一郎「コア・カリキュラム連盟における経験主義と本質主義—梅根悟と海後勝雄の対比に焦点を合わせて—」（『教育方法学研究』42，2016）36 頁。

- (9) 三層四領域について触れた論考には次のものがある。森谷宏幸・藤田尚充・谷口雅子「コア＝カリキュラム連盟・日本生活教育連盟の社会科教育史における〈問題解決学習〉について―戦後社会科教育史の研究（その1）―」（『福岡教育大学紀要 第2分冊社会科編』25, 1975), 大杉昭英「梅根悟の社会認識教育論」（『社会科研究』27, 1979), 尾崎公子「学校教育における『生活』と『知識』―コア連から日生連への転換をめぐって―」（『千里山文学論集』第40号, 1989), 臼井嘉像一・高宮文枝「コア・カリキュラム構想と『総合学習』・『社会科学学習』（Ⅱ）―三層四領域論議―」（『福島大学教育実践研究紀要』36, 1999), 臼井嘉一『シティズンシップ教育の展望』（ルック, 2006）。
- (10) プランと梅根との関わりに触れた論考には次のものがある。山口満・安井一郎「奈良吉城プランの『日常生活課程』の成立過程に関する研究」（『教育学系論集』14-2, 1989), 同「愛知春日井プランにおける『生活課程』の成立と展開に関する研究―経営プロジェクトを中心に―」（『教育学系論集』16, 1990), 同「甲府北中プランの日常生活課程の成立過程に関する研究」（『教育学系論集』16-2, 1992), 同「福井三国中プランの日常生活課程の成立過程に関する研究」（『教育学系論集』17-2, 1993), 安井一郎「戦後初期における日常生活課程論の理論的基底に関する一考察―久保田浩の『生活づくり』論を中心として―」（『教育方法学研究』15, 1989）。船橋秀彦「戦後初期、茨城県におけるコア・カリキュラム実践の特殊学級―茨城県猿島郡静（さしまぐん）小学校の『仲よし』学級の成立過程―」（『地方教育史研究』12, 1991), 奥野朋美「明石附小プランにみるコア・カリキュラム」（『社会科教育の創造』5, 1998), 酒井宏明「愛知学芸大学附属春日井小学校のコア・カリキュラムの実践―春日井プランの成立と展開を中心として―」（『東海学院大学短期大学部紀要』42, 2016）。
- (11) 梅根の「人生カリキュラム」に触れた研究には次のものがある。徐在千「コアカリキュラム連盟における社会科カリキュラム論の深化」（『広島大学教育学研究科博士課程論文集』12, 1986), 花岡かおり「梅根悟のカリキュラム論について―生活教育論争の再検討―」（『筑波大学教育学系研究紀要』4, 1983), 田中武雄「生活教育の遺産と生活科」（『教育 別冊6』（1992), 谷川彰英『問題解決学習の理論と方法』（明治図書, 1995), 金間国晴「生活・経験か生産・労働か―民教協からの梅根悟・生活教育論批判の再検討―」（『研究室紀要』26, 2000）である。この中で、「人生カリキュラム」と社会科との関わりに触れたのは、田中（1992）と谷川（1995）のみである。
- (12) 茨城師範学校女子部附属小・中学校『カリキュラムの研究 プラン＝第三次試案』（1949）3頁。
- (13) 梅根悟『中等教育課程』（誠文堂新光社, 1953）20頁。
- (14) 次の研究が存在する。小原國芳『日本教育百年史4 関東』（玉川大学出版部, 1969), 平井太平「激動の教育界に生きて」（『茨城県史研究』64, 1990), 新井洋三郎「戦後における社会科教育―本県小学校の場合―」（『茨城県史研究』75, 1995), 富田光一郎「茨城県における初期社会科研究―猿島郡境町静小学校を事例として―」（平成17年度 筑波大学大学院教育研究科教科教育専攻社会科教育コース 修士論文）。
- (15) 龍ヶ崎正彦「戦後茨城県下美術教育実践史の研究―民間美術教育運動を中心として―」（美術科教育学会『美術教育学会誌 美術教育学』16, 1995）。
- (16) 工藤哲夫「昭和二十年代の中学校のコア・カリキュラムとことばの教育」（全国大学国語教育学会『第111回宮崎大会研究発表要旨集』, 2006), 工藤哲夫「戦前の中学校に見る統合的思潮とことばの学習」（『東京学芸大学附属学校 研究紀要』36, 2009）。
- (17) 茨城大学教育学部附属小学校『創立拾周年記念誌 附属小拾年史―90年史抄―』（1968）13頁, 同「附属小学校30年史―110年史抄―」（1987）133頁。
- (18) 水戸市史編さん近現代専門部会編『水戸市史 下巻（三）』（1998）197-202頁。
- (19) 茨城大学茨城師範学校附属愛宕小・中学校『九ヶ年のカリキュラム＝水戸・愛宕プラン＝』（1949）4頁
- (20) 茨城師範学校女子部附属小・中学校, 前掲（註12）3頁。

- (21) 寺門の略歴は、次の通りである。1938年茨城師範学校を卒業し、水戸市立五軒小学校訓導となる。1942年から1957年3月まで、茨城師範学校女子部附属小学校に勤務する。その後、茨城県教育庁指導課指導主事、茨城県立教育研修センター研修第一課長、那珂郡大宮町立大宮小学校長、水戸市立第二中学校長を経て、茨城キリスト教大学児童教育学科教授となる。(寺門光輝「略歴」『茨城県立西山研修所講演集 67 心のつながりを太く』1990, 1頁)
- (22) 社会科教育協議会は、広島高等師範学校附属小学校が中心となり、全国から社会科に関心のある附属学校、並びに地域の小学校の代表者を募って開催された。その目的は、「その目的論を深化し、具体的に徹底した実践上の問題を、きたんなく話しあい以て、我が国初等教育の重要な使命を果したいものであります。」とする。会は、重松の講演、広島高等師範学校学長の講演、「研究発表及び協議」を中心に構成され、3日間行われた。寺門の報告は、「研究発表及び協議」の1つとして行われた。(森岡文策「開会の辞」(広島高等師範学校附属小学校学校教育研究会編『学校教育』346, 1947, 1頁)
- (23) 寺門光輝, 前掲(註22) 17頁。
- (24) 寺門光輝, 前掲(註22) 17頁。
- (25) 寺門光輝, 前掲(註22) 17頁。
- (26) 「茨城師範学校教育研究所々員一覧」(茨城師範学校教育研究所『研究紀要』創刊号, 1949) 46頁。
- (27) 寺門光輝「社会的職業的生活経験の指導」(『社会科教育』27, 1950) 17頁。
- (28) 寺門光輝, 前掲(註27) 17頁。
- (29) 寺門氏の自宅での聞き取り調査による(2007年11月3日)。
- (30) 茨城師範附属小では、主事である梅根を中心に『学級・教科経営の基調』(成美堂, 1935)をまとめている。
- (31) 梅根は、後に、茨城師範附属小学校主事の時代に、茨城師範女子部附属の訓導と自宅で読書会を行っていたことを述懐している。(梅根悟編, 前掲(註3) 164-196頁)
- (32) 調査項目は、次の15からなる。1 水戸市の保健衛生方面について解決すべき問題はどんなことでしょうか。2 住宅問題の解決はどうしたら良いでしょうか。3 水害震災大火盗難等の財産や資源の保護についてどのような対策が考えられますか。4 水戸市の産業の重点を何においたらよいでしょうかまたその産業の企業形態はどのようなものが適当ですか。5 水戸市の生産を増強するためにどのような施策が考えられますか。6 食料衣料生活物資等、水戸市の消費生活の面でどのような解決すべき問題がありましょうか。7 市の交通通信運輸の面で改善すべき点はどんなことでしょうか。8 市の娯楽施設について改善すべき点はどんなことでしょうか。9 市内の学校やその他の教養施設の面でどのように改善すべきでしょうか。10 市政の政治面で改善すべき点はどんなことでしょうか。11 市民の宗教心を養うにはどうしたらよいでしょうか。12 この外立派な水戸市をつくるにはどんな解決すべき問題がありますか。13 将来の水戸市はどんな都市として発展させるべきでしょうか。14 戦後の日本を早く復興させ民主文化的な平和国家にするにはどのような解決すべき問題があるでしょうか。15 現在の子供たちの生活を御覧になって改善したい点指導したい点こんな能力態度をつけたいなど。(茨城師範学校女子部附属小学校・同附属中学校「社会的職業的生活経験をコアとするカリキュラムの運営」『カリキュラム』4, 1949, 22頁)
- (33) 『要素表』では、国語、算数・数学、図工、家庭、体育、衛生、音楽、理科を取りあげている。
- (34) 寺門光輝「社会調査について」(茨城師範学校教育研究所『研究紀要』2, 1949) 65頁。
- (35) 研究会について寺門は、『『九ヶ年のコアカリキュラム』を女師付属でまとめ、盛大な研究発表会を開催した事は今もなつかしい。』と述懐している。(寺門光輝「50年の教育の流れから改革へ具体的な研究を」『朝日新聞』1988年4月24日)
- (36) 梅根悟「コア・カリキュラムについて」(山崎喜與作編『コア・カリキュラムの研究』(社会科教育研究所, 1948) 10頁。

- (37) 梅根悟, 前掲 (註 36) 11 頁。
- (38) 梅根悟, 前掲 (註 36) 12 頁。
- (39) 梅根悟, 前掲 (註 36) 12 頁。
- (40) 梅根悟, 前掲 (註 36) 15 頁。
- (41) 梅根悟, 前掲 (註 36) 16 頁。
- (42) 梅根悟, 前掲 (註 36) 17, 18 頁。
- (43) 梅根悟, 前掲 (註 36) 18 頁。
- (44) 梅根悟「生活学校とコア・カリキュラム」(『カリキュラム』創刊号, 1949, 8 頁。
- (45) 梅根悟「生活教育における社会科の地位」(『教育復興』1, 1948) 12 頁。
- (46) 梅根悟, 前掲 (註 45) 12 頁。
- (47) 梅根悟, 前掲 (註 45) 12 頁。
- (48) 梅根悟, 前掲 (註 45) 13 頁。
- (49) 茨城大学茨城師範学校附属愛宕小・中学校, 前掲 (註 19) 5 頁。
- (50) 茨城大学茨城師範学校附属愛宕小・中学校, 前掲 (註 19) 5 頁。
- (51) 茨城大学茨城師範学校附属愛宕小・中学校, 前掲 (註 19) 5 頁。
- (52) 茨城大学茨城師範学校附属愛宕小・中学校, 前掲 (註 19) 3 頁。
- (53) 寺門光輝「社会的職業的生活経験の指導」(『社会科教育』27, 1950) 17 頁
- (54) 寺門光輝, 前掲 (註 53) (1950) 17 頁。
- (55) 茨城大学茨城師範学校附属愛宕小・中学校, 前掲 (註 18) 136 頁。
- (56) 茨城大学茨城師範学校附属水城小・中学校『生活学習の基底と年間計画』(1950)。
- (57) 例えば, 当時, 中学生として茨城女子附小中の生徒であった西尾幹二は, 社会科をコアとした学習が進む中で起きた問題について, 「当然ながら一般学力はどんどん低下していく。わたしの母などはそれを一番心配していた。そして, ついに年末には眉をひそめる事態が現出した。」と自伝の中で述べている。(西尾幹二『わたしの昭和史 2』(新潮社, 1998) 29 頁)

(2018年 1月11日 受付)  
(2018年 3月 2日 受理)